

我願(・楽)うが故に、我生まる？ (その一)

ともに公共する(生命開新) 美学をともにデザインする
ワークショップ

第149回

2024.4.16 (火) 19:00~ 片岡龍

・感動の大きなうねりを巻き起こした『自分をえらんで生まれてきたよ』

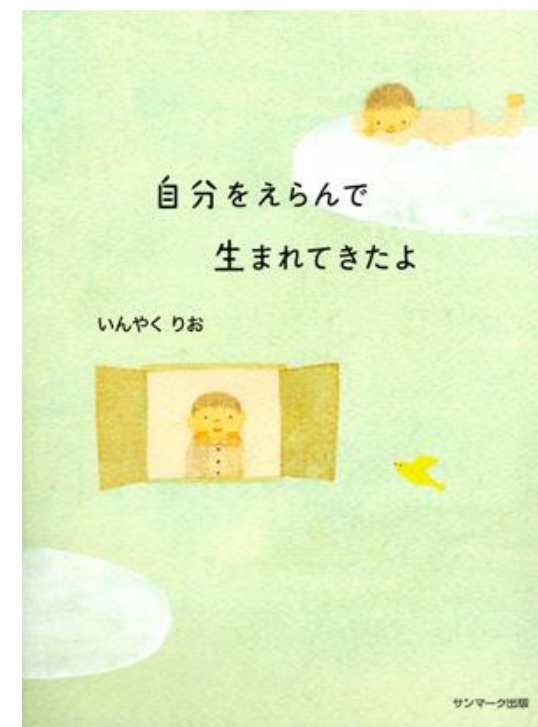
(サンマーク出版編集部ブログ 2022.06.17 <https://www.sunmark.co.jp/blog/wp/archives/5131>)

この本は、小学生の男の子・りお（理生）君が、お母さんのお腹の中での事、お腹の中に来るまでの事を語ったお話を本にしたものです。

心臓と肺に疾患をもって生まれたりお君、入院は30回以上、のべ2年にもわたる生活だったそうです。

どんなにか辛く大変だったかと想像しますが、そんななかで、りお君が語る言葉は、悲壮感がないのです。

ぼくが病気で生まれたのは、
ずっとずっと、幸せになるためだよ。
ぼくは、病気だったから、
幸せなんだ。
ぼくは、病気だったから、
心の言葉が話せるんだ。
だから、いつか、心の幸せを配る
サンタさんになるんだ。



りおくんの言葉は純粹でわかりやすく、考えさせられる事ばかりでした。

神さまがくれたものは、たくさんある。

まず、心。気持ち。いのち。体。

それから、考える、頭。

ぼくは、神さまからのプレゼントなんだ。

だから、自分をたいせつにする。

自分をたいせつにすると、

地球へのおみやげに、なるんだよ。

この本をはじめて読んだとき、私は病気で生まれてきた兄のことを思いました。「ああ、兄は自分で病気をえらんで生まれてきたんだ」と……。

[…]

10年前の本ですが、世の中が混とんとしている今、多くの人に読んでいただきたい言葉ばかりです。 […]

- ・食からの情報民主化プロジェクト BY INYAKU.NET (印鑰 智哉) 2012/05/21
<https://project.inyaku.net/archives/779>

息子の詩集が今日出版されることになった。

心臓と肺に障がいを持って生まれた息子、連れ合いの実家が集中治療室と化して、果てしない闘病生活、言葉の遅かった息子が話し始めた言葉は私たちの看護のつらさを癒してくれた [···]。

ぼくは、病気を選んで、生まれてきた。希望をもって、生まれてきた。心を感じることで、勇気が出る。それがつまり、希望のことなんだ。

心は、神さまのかけらで、体は、地球のかけらだよ

すごい秘密に、気づいたよ。時間があるから、ものはある。
時間があるから、光はある。ものは、ぜんぶ、時間でできている

[···]

- ・『自分をえらんで生まれてきたよ』から

生まれる前、ぼくは、宇宙にいた。流れ星に、乗っていた。(5歳ごろ)

生まれる前、ぼくは、「幸せの太陽」を、運ぶ仕事をしていた。神さまに頼まれて、お手伝いで。「はいはい」って、たくさん働いた。だから、こんなに元気なんだ。病気のときもあるけれど、病気のときも元気なんだよ。いっぱい仕事したからね。

「幸せの太陽」や、「幸せの月」や、「幸せの星」を、ママや、パパや、おとなみんなに運んでいた。赤ちゃんは、みんなそうだよ。(6歳)

星の世界を旅した後、ぼくは雲の上に行った。雲の上には、神さまがいた。神さまはおじいさんだけど、おひげは、はやしていない。ぼくは雲の上で、雨を降らせていた。ぼくは、上手だったよ。

(4歳 ※9歳のとき追記)

ぼくは、雲の上からいろいろ見て、

「**ここの家がいい**」って、

すぐに決めて、神さまにいいに行った。

「**一度決めたら変えられないよ。いいんですか**」

って、神さまにいわれて、

「**ここしかない、ここがいいんです**」といった。

指をぐるぐる回したら、

目が回るくらいの渦まきができて、

それがどんどん細長くなって、

米粒みたいになって、ピカッと光って、

それで、ママのおなかに入った。

おなかに入るって決めたとたんに、

あっという間に、おなかに入った。

本当にあっという間に。 (9歳)

自分で生まれるのは、なかなかたいへん。

だから、みんなに助けってもらって、生まれる。

地上に来るときも、天使にお迎えしてもらう。

おなかに入るまで、ずっと、天使といっしょにいる。

おなかに入ってしばらくすると、天使は上に帰る。

すると、おなかの中にひとりになって、寝たままです。 (8歳)

赤ちゃんが生まれてくるのは、

みんなを幸せにするため。

お母さんやお父さんだけじゃなくて、

みんなを幸せにするため。

生まれてくるのは、小さな喜び。

みんなを幸せにすると、

もっと大きな喜びになる。 (9歳)

人間は、生まれたらすぐ、たくさんのことを忘れてしまう。

みんな、おなかに入る前にはちゃんとわかっていたのに、忘れてしまう。おなかの中にスポンと勢いをつけて入るから、ストーンと落ちたときに、わかっている頭が驚いて、パーっと逃げていっちゃう。

忘れちゃっても、もう一回、身につけるのが、人間っていうものだよ。

たいせつなことを、忘れたまま死んじゃう人は、地上にいたことを、損していたと思う。（8歳）

生まれてくるってというのは、
幸せなんだよ。

生きているというのは、大きな奇跡。
あたりまえと思っている人も多いけれど、
奇跡なんだ。

だから、ぼくは早くおとなになって、
みんなにそれを伝えたい。（8歳）

人がここに来るのは、
新しいことを学ぶためだ。
ここに来るのは、
たましいの寄り道のようなものだ。
ここで学んだら、死んで、もとの世界に還っていく。
学ばないと、次のところに進めないんだ。（9歳）

人間は、生きのびるために、生きている。
しんどいことも、
幸せなんだってことがわかるために、
地上に下りてきたんだよ。

しんどいというのは、
じつは小さな喜びなんだよ。
しんどくてたまらなくても、

(承前)

その後に、やっぱり疲れがとれるでしょう。
そのとき、前よりももっと元気になっている。
だから、しんどいってたいせつなことで、
しんどい思いができるというのは、
じつは、奇跡なんだよ。(8歳)

月は生きている。生きていなければ、何もできない。
ものも生きている。蒸発してしまうもの、消えてしまうものも、生きている。

空気だって、心がある。みんなは空気の心を吸って、生きているんだ。
心をもたなければ、何にもなれない。(9歳)

水も、生きている。水は小さい粒でできているけれど、それより小さい粒があって、それが、神さまのたましいなんだ。(7歳)

[...] 時間は、目に見えない、小さな粒でできている。
ものも、目に見えない、小さな粒でできている。

うんと小さくすると、みんな同じ。
時間の粒も、ものの粒も、光の粒も、みんな同じ。
だから、ものは時間で、できているんだ。

みんな同じ粒でできているっていうのが、すごいことなんだ。
みんな同じ粒でできているっていうのが、いいことなんだよ。

粒と粒が集まると、のりみたいに、くっつく。
心も、肉も、みんな、粒が集まってできている。神さまも粒。地球も粒。星も粒。みんな同じ、目に見えない小さな粒で、できている。
骨も、肺も、髪の毛も、みんな、小さな粒でできている。

小さな粒がないと、ぼくたちは、生きていけない。
だから、自分の体に、いじわるしちゃ、だめ。
人を傷つけるのも、だめ。(7歳)



いんやく のりこ (印鑰紀子)

1971年、東京生まれ。2011年、沖縄に移住。慶應義塾大学卒。ホリスティック医学、周産期心理、オルタナティブな教育などの領域で、書籍構成や翻訳にたずさわる。著書『心の目で見たたいせつなこと、ママに聞かせて』（青春出版社）、『宝の海をまもりたいー沖縄・辺野古』（現代思潮新社）、新刊に詩集『ママ、きっと会いに行くよ。』（PHP出版）。

矢鋪紀子の筆名で、訳書『女神のころ』（現代思潮新社）など多数。



いんやく りお (印鑰理生)

2001年、東京生まれ。鏡が丘特別支援学校中学部3年生。ベストセラー詩集『自分をえらんで生まれてきたよ』『神さまがくれたひとすじの道』（サンマーク出版）の著者。2011年に沖縄移住後、缶から三線に出会い、エフェクター、即興多重録音システム、ギター奏法などを取り入れた斬新な音作りと、背面弾きなどの豪快なパフォーマンスが人気で、ライブ多数。[…]

- ・みんな、自分の意志で生まれてくる。『幸せのかたち』より 溝邊 貴彦
(仏教人生大学 今月の法語 2014年11月 <https://bukkyo-seikatsu.jp/hougo/318/>)

先日ひよんなことからたどり着いたフェイスブックのコミュニティ、『幸せのかたち』に助産師さんの記事が載っていた。記事を読んだとき、私はまさに目からうろこが落ちた [⋯]。

[⋯] 私はこれまで出産とは、**母親が地獄の苦しみに耐え、母親自身の力で赤ちゃんを、新しい命を誕生させる**、子に対し無限の愛を持つ母親だからこそできる仕事であると、そう思っていた。 [⋯]

助産師さんがいうには実は赤ちゃんの方が母親よりも何倍も苦しいのだそうだ。陣痛は子宮の筋肉収縮らしく、赤ちゃんは収縮しているときへそのおからの酸素が途絶え、息が出来なくなるらしい。子宮の収縮は1分間。思い切り首を絞められ1分間。それが何度も繰り返されるわけで、これに耐えられなければ赤ちゃんは死んでしまうそうだ。まさに命がけである。

赤ちゃんはとても賢く、陣痛に耐えられるかどうか判断し、**一番いいタイミングで自分の生まれる日を選ぶ**そうだ。そのタイミングが来たら、赤ちゃんは自分で陣痛の起こるホルモンを出す。

ということは、自分の誕生日は自分で選んだ日ということになる。助産師さん曰く、「**私たちはみんな、自分で判断して、自分の意志で生まれてくる。**生まれたくて生まれたんじゃない！なんて人はいない。」 [・・・]

私たちは様々な優劣をつけられる中、驕ったり劣等感に陥ったりするうちに本当の自分の尊さとか、**生まれたい！生きたい！**という、いのちの源にある**生きる意志**を忘れてしまっているのではないかと思う。この**根源の願い**といってもよい生きる意志は、能力とか学歴とか地位、名誉、財産では量れないということ。そしてこの願いはどこから受け継がれたものかという、いのちの歴史がすっかり抜けてしまって、いつの間にかいのちを刹那的にわが物としてしまっている自分にハッとさせられたのです。

お釈迦様は生まれた直後に立ち上り、右手で天を指し、左手で地を指して「**天上天下唯我独尊**」と云われた。これは自分は誰にも変わることできない人間として生まれており、このいのちのまま尊いという何にも代えられない、**己の生きる意志**を示している。 [・・・]



溝邊 貴彦 僧侶

「愚者になりて往生す」（法然上人）山形生まれ、山形育ち。会社員を経て、僧侶への道を歩んでいます。趣味はロングボード

『法華經』法師品第十（鳩摩羅什の漢訳）

- ・ 諸有能受持 妙法華經者
捨於清淨土 愍衆故生此
当知如是人 自在所欲生 […]

諸の能く 妙法華經を受持することあらん者は
清淨の土を捨てて 衆を愍むが故に此に生ずるなり
当に知るべし是の如き人は **生ぜん**と欲する所に自在なり。

（サンスクリット版『法華經』法師品、坂本幸男・岩本裕訳）

後の世に、この上ないこの經典を語る人は、生まれ変わるに際して、その**誕生を選ぶ力**によって、そこに姿を現したのだ。

『法華經』法師品第十（鳩摩羅什の漢訳）

・ 当知是諸人等。 [・・・] 成就大願。愍衆生故。生此人間。

当に知るべし、是の諸人等は、 [・・・] **大願を成就して、衆生を愍むが故に、此の人間に生ずるなり。**

・ 当知是人。自捨清浄業報。於我滅度後。愍衆生故。生於悪世。広演此経。

当に知るべし、是の人は自ら清浄の業報を捨てて、我が滅度の後に於て、**衆生を愍むが故に、悪世に生れて、広く此の経を演ぶるなり。**

願兼於業(『聖教新聞』用語解説)

「願 [がん]、業 [ごう] を兼 [か] ぬ」と読み下す。妙楽大師湛然が『法華文句記』巻8で、法華經法師品第10の文を解釈した文。**悪道・悪世に苦しむ人を救うため、自ら願って悪道・悪世に生まれてくること。**願は願生、業は業生のこと。業生とは、過去世の善悪の業によってその報いとして相応の世界・国土に生まれることであり、願生とは、衆生救済・仏法弘通の誓願によって目指す世界・国土に生まれること。[…]

(<https://www.seikyoonline.com/commentary/?word=%E9%A1%98%E5%85%BC%E6%96%BC%E6%A5%AD>)

『開目抄』

(日蓮の現在の苦しみも) 「例せば小乗の菩薩のいまだ惑いをたちきらざる者が、**願兼於業 (がんけんのごう)** と申して、つくりたくない罪ではあるが、父母などの地獄に墮ちて大苦をうけるのを見て、きまったように罪をつくり、**願つて地獄に墮ちて、苦に同 (どう) じ、またその苦に代われるのを悦びとするがごとくである**」 (日本の名著『日蓮』163頁)

開目抄（平凡社世界大百科事典）

日蓮の代表的著作。1272年(文永9)撰。身延山久遠寺旧蔵の**真跡は焼失したが、日乾(につけん)の真跡との対照本がある。**

1271年の〈文永八年の法難〉で、日蓮とその門弟が弾圧され、転向者が続出、踏みとどまった者や日蓮自身も、法華經の信奉実践者がなぜかくも受難するのかとの疑惑を抱いた。佐渡の日蓮の緊急かつ重要な課題は、この疑惑をとくことであった。

この受難の弁証、意味づけのために書かれたのが本書で、[…]

(高木 豊)

湛然 711—782（平凡社世界大百科事典）

中国，唐代中期の僧。天台宗の第6祖。草溪または妙楽大師とよばれる。[…] 禅宗の盛行に対決し，天台宗の伝統を確立し，教学の中興をはかって，智百(ちぎ)の三大部その他の注をつくり […] その他の著作を出す。弟子も多く，[…] 道邃と行満は，最澄の受法の師である。

(柳田 聖山)

『御義口伝 卷上』 法師品十六箇の大事

第二「成就大願、愍衆生故」「生於惡世、広演此經」の事

御義口伝に云く、「大願」とは、法華弘通なり。「愍衆生故」とは、日本国の一切衆生なり。「生於惡世」の人とは、日蓮等の類いなり。「広」とは、南閻浮提なり。「此經」とは題目なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

『御義口伝 卷上』 涌出品一箇の大事

第一唱導之師の事

御義口伝に云く、涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり。本化の菩薩の所作としては、南無妙法蓮華經なり。[…] 今、日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、皆地涌の流類なり。[…] 又云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし。

御義口伝（『国史大辞典』）

日蓮が直弟子の六老僧のために身延山で建治年中（1275-78）自身の『註法華経』の要文について講義したものを、六老僧の一人である日興が弘安元年（1278）に筆録したと伝えられるもの。二巻。

巻頭に南無妙法蓮華経を釈し上巻に序品から涌出品（ゆじゅっぽん）まで十五品の大事百十四条を掲げ、下巻に寿量品から普賢品（ふげんぼん）まで十三品の大事百六条と『無量義経』の六条、『普賢観経』の五条の大事を列ね、巻末別伝に二十八品に一文宛の大事、二十八品悉く南無妙法蓮華経の二条を挙げています。

内容は発達した**本覚思想の傾向が著しい**ので、日蓮の著作ではなく**滅後の門弟による偽作**であろうといわれている。（大野達之助）

・望月海淑「法華経における生命観」（『棲神』60、1988）

「法華経は仏と人間とのかかわりあい [...] の説示のために、方便品の一仏乗、譬喩品での前世からの仏にたいして立てた本願によって現世の生命があること、法師品の現世の生命は前世の願業によってあること、従地涌出品での地涌の菩薩とその住所、如来寿量品での久遠の生命の展開とが説き示されたものであろう。したがって、それら各品はたがいに

孤立したものではなくて、それぞれつながりあっているものとして、関連づけて捉えられなければならない。それゆえにこそ、**仏の生命が久遠実成**だという時、それは**わが身の生命の無限性**を説いたものとして、受けとめられるのであろう。

日蓮上人は、その著「開目抄」の中で、善に付け悪につけ法華経をすつる、地獄の業なるべし。**本ト願**を立ッ。と述べ、更に「観心本尊抄」では、

今**本時**ノ娑婆世界ハ、[…]

と述べて、ともに「本」に言及している。[…] ここで「**本**」といわれた日蓮上人の御意図は、釈尊と私・日蓮とのかかわりのあり方を示すことにあった、ということが出来るであろう。すなわち、**本ト願**を立ッ、と言われた**本ト願**は、前世において日蓮上人自らが釈尊のもとで立てられた願であり、今本時といわれた**本時**とは、前世において釈尊におあいをし、その時に釈尊とともにすごされた、そのときを意味する言葉として、受けとめられていなければならないであろう。

・上原専禄「誓願論」1970（『上原専禄著作集16 死者・正者一日蓮認識への発想と視点一』）

「日蓮上人の誓願というものは […] 『開目抄』にいちばんはっきりと表われている […]。その『開目抄』における誓願は […] 「大願を立てん」、と読んでいられるところもおありか、と思います。 […] しかし […] 『昭和定本』では、「本願を立ッ」と書かれている。私はこれが正しいと思う。

[...] 「大願」という言葉は [...] 日蓮上人の真蹟が伝わっていないで、後世の写本だけで伝わっているご遺文だけに出てくる言葉であります。真蹟が現存しているものには、「大願」という言葉は出て来ないのであります。

[...] 日蓮上人の念頭にはいつでも [...] 釈迦如来のことばというものが、いきいきと生きつづけ、働きつづけています。 [...] 頭の中だけではなく、心の中にも、五臓六腑、からだの全体にも、釈迦如来の誓願というものが、いつもいっぱい満ちあふれています。これが大事なところですよ。 [...]

それはこういうことです。釈迦如来の誓願 [...] が歴史的現実の場において未来永劫実現されつづけていくためには、そのときそのときに釈迦如来の誓願を成就していくメディアというものが必要である。 [...] 地涌の諸菩薩はそのメディアに他ならない。 [...]

・上原専禄「生命の蔑視」1969（『上原専禄著作集16』）

「日本の仏教者、なかんずく鎌倉時代の仏教者が、とくに現世のいのちというものをどういう具合にみていたかということ、今日における生命の蔑視の風潮にかんがみてふりかえるならば、とうぜんのことながら、祖師たちは、**おどろくほど現世におけるいのちを大事にしている**のです。たとえば栄西禅師の『喫茶養生記』を見ましても、あるいは親鸞の作だといわれている『現世利益和讃』を見ましても、日蓮の『可延定業御書』を見ましても、近代の僧侶においては容易に発見することのできないような**生命尊重**があるのです。本来は死を、とくに死後を大事にするといわれている仏教者においては、現世の生活とか生命とかには無関心のように思われていました。しかし鎌倉時代の高僧たちについてはそのことはあたらぬ。[…] 『可延定業御書』には「**一日のいのちは三千界の宝にも過ぎて候うなり、一日も生きておわせば功德積もるべし。あら惜しのいのちや、あら惜しのいのちや**」とあります。[…]

- ・中村宏信「日蓮上人の生死観—いのちをめぐる—考察—」（『興隆学林紀要』11、2003）

宗祖のいのち観、生死観をさぐる上で、次に示す二つの御遺文に注目されたい。

爾前の経々の心は、心より万法を生ず。譬へば心は大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はしからず。心すなはち大地、大地則草木なり。爾前の経々の心は、心のすむは月のごとし、心のきよきは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり。此れをもつてしろしめせ。白米は白米にはあらず。すなわち命なり。

（建治二年『事理供養御書』、五五歳）

月変じて仏となる。稲は変じて苗となる。苗は変じて草となる。草変じて米となる。米変じて人となる。人変じて仏となる。女人変じて妙の一字となる。妙の一字変じて台上の釈迦仏となるべし。

（弘安三年『王日殿御返事』、五九歳）

抜粋したこれらの部分に共通して示されていることは、まぎれもなくこの世に存在するものすべてに仏のいのちが宿っているということではないだろうか。

・安田理深「内在的超越 一願生論(三)一」1963 (『親鸞教学』98、2012.2)

願生を主題としてできているのが世親の「願生偈」ですね。それでこの「願生偈」は[...] 背景に『無量寿経』がある。それで『無量寿経』には本願力という如来の**本願**が説かれている。それによって世親は、願生ということをおるんです。私の関心は[...] 願生といっても本願といっても非常に特殊な表現ですが、今日の我々がそれをもつ場合には、そこにもっと普遍的な問題、どこまでも特殊であるけれども、特殊な歴史に即して普遍的な意味があることを明らかにするという。そうしなければひとつの思想的問題というわけにはいかんだろうと思う。

[...] そこに私は**人間存在という問題**があると思う。人間というものは願生というものがあってもなくても人間であるということとはできないという意味ですね。**願生ということにおいて初めて人間が成就**する。こういうような見当です。そういうことが私の関心のあるところでは。

[...] **生(しょう)**という、願生の生ですね。これは [...] 簡単に言えば**衆生の生**です。しかしその生は [...] 心理学や生理学の領域において対象化される意味の**生(せい)**ではない。どこまでも**生(しょう)**という場合には**実存**という意義をもたなければならない。[...] **existence**という言葉です。[...] 外に立つという意味があるわけですね。**何かから出てきてそこにある**という意味です。[...] essenceは本質でしょう。本質存在というものに対して現実存在と。**何か本質から出てきた**という。人間の本(もと)です。本から出てきた、何が本かということはひとつの大きな問題だと思います。／仏教では如来の如ということがその本をあらわしている。[...] 如というものは本になりますから、それだから**如来の本願**と、こういうわけですね。[...] しかし同時にそれは我々が願生という自覚をもった場合には、その自覚はかえって自覚した我々を回転するんです。つまり実存を転ずるんであります。本来にかえす意味があるわけです。[...] 自己を失った生がかえって自己というものを取りかえす。[...] **願**というのは**生からでてきた願**ではない。**生を転ずる願**ですね。

[...] **願生**は、回心ということであらわされるような人間の変革です。
[...] これはティーリッヒの概念ですけれども、**new being**。ああいうような意味があるんですね。new being。この生が願生ということですね。新存在。新しい存在というね。/それだからともかく「願生偈」というものを見てみると、根源を失った人間が根源にかえった。**根源にかえると、かえった人間の上に根源が自己を開いてくる**。自己を開示してくる。そこにはひとつの大きな開かれですね。根源にかえるという、かえった人間の上に、根源というものが自己自身を開示してくる。 [...]

・安田理深「衆生の自覚としての本願 一願生論(五)一」1963(『親鸞教学』100、2012.12)

[...] 願に生をつけて「**願生**」というところには、**衆生が願を自覚する**。願に目覚める、そういうことがあると思います。如来の願に目覚めた、根源に目覚めたと。**衆生が自己の根源に目覚めた**ということが願生なんだから。そういう点でやはり**本願**はなるほど衆生の根源であるけれども、[...] **根源を自覚されている。自覚としてあらわされておる**。 [...]

・ 話題提起

胎内記憶のあるこどもは案外多いらしい。その科学的検討は別に必要だが、人文学的・詩的想像力の問題として見た場合、我々生命ある存在がどのようにこの世界に生れてくるかをめぐる想像力の有力な源泉の一つは、日本では仏教にあるのではないだろうか。そこから考えると、「我願う、故に我生まる」と言ってもよいのでは？

ただし、その願は、自己のものでありながら、自己を超えているため、意識レベルでは捉えられない。つまり、生まれた後に、忘れられてしまう（『法華経』譬喩品第二でも「舍利弗、我昔汝をして仏道を志願せしめき。汝今悉く忘れ・・・」と）。したがって、願は自己の根源への目覚めであり、願生の自覚とは自己の開新とされるが、この目覚め、自覚は、生命感覚によるものではないか？

胎内記憶だけでなく、毎朝の目覚めによって、或いは突然の病気等によって、新たな自己に出会うといった日々の開新も、同じく「我願う、故に我生まる」と言ってもよいのでは？